



家訓を作ってみませんか

石川県社会教育協会会長 梅田 和秀

飲食店などで時々ハツとさせられる言葉に出会うことがあります。先頃、ある飲食店で一枚の張り紙に目を奪われました。「失敗のない日は、何もしない一日」と書かれていました。

かつて私が教育行政の職に就いた頃、前任校の先輩に、各方面から何かとお叱りをこうむっているとの近況を話した際、それは仕事をしている証拠じゃないかと逆に激励されたことを思い出しました。

それはともかく、この張り紙から店主のポリシーが伺われます。ただ、張り紙の場所が従業員の目につく厨房入り口でもあったので、従業員の心がけ、いわゆる社訓にもなっているのかと思います。この言葉は仕事の上だけではなく、日常生活にも相通じるものであることから、立派な成人教育、社会教育になっているのではないかとも思い、おもわず感服しました。

社訓の原型をたどると江戸時代の豪商や豪農の家訓にいきつきます。商品経済が発達になり、苦勞をして財をなした豪商や豪農が、「家業の永続」を願い今後の子孫が守っていかねばならない事柄（勤勉・節約・正直など）といった生活規律や使用人の使い方を指針として書き残すようになったのだと言われています。

こうした家訓の制定は、より自由に経済活動が可能となった明治時代に入るとより広くみられるようになっていきます。家訓というとか堅苦しく、特定の家の専売特許的なもの、また、中には戦前の家父長制的家族制度の残滓のように感じる方もおられるかもしれません。確かに、昭和十五年に石川県社会教育課が旧家を対象に収集した数々の家訓を今回改めてみてみると、そうした内容のものも少なくはありません。

しかしながら、中には、「御飯は家族一緒に」「子供に対しては

心配話を聞かせぬこと」「子供の健康には特に注意すること」「主婦が主人の帰宅を待ち、互に其の日一日の出来事を語り合い親しみを増す」など、家族の和を大切に、子供をいたわるなど家族生活を営む上で極めて肝心な事柄を平易な言葉であらわした項目を含むものもみられ、心が温まります。

事実かどうかは別として、雑誌『暮しの手帖』を創刊した大橋鎮子さんをモデルとしたNHK朝ドラ「とと姉ちゃん」にでてきた小橋家のとと（父）竹蔵が決めた三つの家訓もその一例にあげることができると思います。「朝食は家族皆でとること」「月に一度家族皆でお出かけすること」「自分の服は自分でたたくこと」の三箇条には、竹蔵が偉ぶることなく、自ら目指す家族像が日常的な言葉で端的に言い表わされており、家庭教育の指針が読み取れます。

家訓はそれぞれの家族内のとりきめであり、上からの強制で制定されるものではありません。従って基本的には表にでるものでもないもので、近年の状況はわかりませんが、家訓を制定し、家族全員が納得し実践することは、家族の絆を深めるだけでなく、家庭の教育力を確実に高め、親も子も育つことにつながるのではないかと思うのです。

家庭教育は、それぞれの家庭の自主性が尊重されるあまり、周囲が遠慮がちになることが多分にあります。しかし、子育て等で困惑し、悩んでおられる方も少なくないのも現実です。そのような方々への必要に応じた支援はなされるべきであり、その一つに家訓づくりという提案があってもよいのではないのでしょうか。そして、そのような機会をつくるのも本協会の仕事にせねばならないのではないかと思うのですが如何でしょうか。